

自閉症をもつ患者の看護を通して

○倉島三千代、大久保ひとみ、相川俊子、
糸井留美子、細貝愛美

岩井整形外科内科病院

【はじめに】内視鏡手術を受ける18歳の自閉症患者を受け持った。椎間板ヘルニアで多くの病院を受診するが自閉症のためと治療が受けられなかった。当院で内視鏡手術を受け入院から退院までスムーズな経過で問題は生じなかった。またA君から「帰りたくない」との言葉も聞かれ、私たちのかかわりは受け入れられたと感じることができた。看護の基本とした3つのポイントの、何がどのように受け入れられたのかを知りたいと考え、退院後に母親へインタビューを行った。その結果を含め報告する。

【患者紹介】A氏 男性 18歳 術式：左MED

【方法】①退院5カ月後に母親へのインタビュー施行。②文献で振り返りを行なう。

【結果】①3つの看護のポイントを分かりやすい説明、A氏のペースにあわせる、家族の協力を得るという看護の基本にそってかかわったことがA氏と家族に受け入れられた。②文献から自閉症の特徴をとらえた対応が不足していた。

【考察・まとめ】看護のポイントはスタッフ全員で共有した。また医師やコメディカルもA氏への訪室は積極的に行なっていた。母親へのインタビューでは「何かやる時と次にやることを説明してくれた」「時間をかけずに一度にやってくれた」「先生や他の職員も優しく接してくれた」ことが安心できたと話されていた。またインタビューの内容と文献から、絵を使った説明やスケジュール表を用いることが理解されやすいと気づくことができた。A氏は1年半にわたり多くの病院を受診するが「自閉症」に対する偏見から適切な対応が受けられないでいた。しかし実際は特別なかかわりを必要としなかった。自閉症は一つの個性であり、個に合わせたかかわりが患者、家族の安心につながるということが分かった。